

2020. 9. 27 (日) マタイ22:41~46

22:41 パリサイ人たちが集まっていたとき、イエスは彼らにお尋ねになった。

22:42 「あなたがたはキリストについてどう思いますか。彼はだれの子ですか。」彼らはイエスに言った。「ダビデの子です。」

22:43 イエスは彼らに言われた。「それでは、どうしてダビデは御霊によってキリストを主と呼び、

22:44 『主は、私の主に言われた。「あなたは、わたしの右の座に着いていなさい。わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまで』』と言っているのですか。

22:45 ダビデがキリストを主と呼んでいるのなら、どうしてキリストがダビデの子なのでしょう。」

22:46 するとだれ一人、一言もイエスに答えられなかった。その日から、もうだれも、あえてイエスに質問しようとはしなかった。

#### <説教>

「律法の中でどの戒めが一番重要ですか」(36)というのが律法学者たちにとって、またその仲間であるパリサイ人たちにとって一番大事な問題でした。

それはもちろんイエスにとっても大事でした。

それでイエスはその問いにきちんとお答えになりました(37-40)。

とはいえ、マタイによればその質問も「イエスを試そう」という不純な動機・目的のものでした。

つまり彼らはそれまでのイエスのみことばやみわざを見聞きしながら、また直接イエスと問答をして来ていたにもかかわらず、なおもイエスを「生ける神の子キリスト」とは頑として認めようとしませんでした。

彼らは律法の戒め(しかもそれは神の目指したものではなく自分たちが勝手に決めた規則としての戒め)を厳しく守ることに精一杯でした。

しかし、そのとき彼らが真剣に考えるべきは「キリストについて」でした。

「キリスト」はどういうお方なのか正しく知り、そしてイエスとその「キリスト」「生ける神の子」だと認めてイエスを信じることこそがただ一つの大事だったのです。

それで、「パリサイ人たちが集まっていたとき、イエスは彼らにお尋ねになりました(22:41)。

22:42 「あなたがたはキリストについてどう思いますか。彼はだれの子ですか。」彼らはイエスに言った。「ダビデの子です。」

キリストが「だれの子ですか」と聞かれて「ダビデの子(子孫)です」と答えるのはパリサイ人たちにとっては簡単なことでした。

そのことは特に「預言者」(40)によって証言されていました。

「その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に就いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これを支える。」(イザヤ9:7a)

「エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。」(イザヤ 11:1)

「見よ、その時代が来る。一主のことば—そのとき、わたしはダビデに一つの正しい若枝を起こす。彼は王となって治め、栄えて、この地に公正と義を行う。」(エレミヤ 23:5)

『わたしはわたしの選んだ者と契約を結びわたしのしもべダビデに誓う。わたしはあなたの裔をとこしえまでも堅く立てあなたの王座を代々限りなく打ち立てる。』(詩篇 89:3-4)等。

それで「**ダビデの子・キリスト**」というキリスト理解は彼ら（と彼らの教えを受けていたユダヤ人民衆）にとって当然のことでした。

そんな彼らが「**ダビデの子・キリスト**」に期待し、願望していたことは、あのダビデ王のような強大な実力（政治的権力・武力）によって自分たちを異邦人ローマの支配から解放してくれて、かつてのようなユダヤ人の王国を回復・再建してくれることでした。

そういう意味では祖先であるダビデ王より偉大な人間を期待していたかもしれませんが、それでも彼らが期待し願望していたキリストは、精々そんな人間「**ダビデの子**」でした。

いやむしろそういうことだけをしてくれれば良いと考えていたのでしょう。

特にパリサイ人や律法学者たちにとっては、やれ悔い改めて福音を信じなさいだの人の罪を赦すだの言ってみたり、悪霊につかれた人から悪霊を追い出すとか病人を癒やすとかしてみたり、自分たちの教えと違ったことを教えたり行ったりしてみたり、ましてや自分が神の子だ、自分がキリストだなどと言うような人物（イエス）は神を冒瀆する者であり、有害・危険人物でした。

パリサイ人や律法学者たちにとっての「**ダビデの子・キリスト**」とは、そういう自分たちの考えや教えの範囲内の、自分たちの期待に答え願望をかなえてくれる、自分たちに都合の良い人間に過ぎませんでした。

彼らの考えるキリストはダビデと同じ人間、地上的な王でしかありませんでした。

そんな彼らにとってイエスは「**ダビデの子・キリスト**」ではあり得ない、あってはならない、都合の悪い人間でしかありませんでした。

イエスはパリサイ人や律法学者たちの「**ダビデの子・キリスト**」観の間違いを正すべく彼らに続けてお語りになりました。

**22:43** イエスは彼らに言われた。「それでは、どうしてダビデは御霊によってキリストを主と呼び、

**22:44** 『主は、私の主に言われた。「あなたは、わたしの右の座に着いていなさい。わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまで』』と言っているのですか。

**22:45** ダビデがキリストを主と呼んでいるのなら、どうしてキリストがダビデの子なのでしょう。」

イエスが引用なさったのは詩篇 110 篇（1 節）でした。

パリサイ人や律法学者たちもこの詩篇が「**キリストについて**」言っていることは分かっていたいました。

その上で、イエスは、あのダビデ王自身がキリストのことを自分の子だ子孫だとは言わ

ないで、「主」(43,45)、「私が仰ぎお仕えする私のご主人」「私の主」(44)と呼んでいる、しかもそのことは「御霊によって」(43)いる、つまり主なる神がダビデにお示しになったことだから間違いのない真理だと言われたのです。

しかもそのダビデの「主」であるお方は、主なる神によって神の「右の座」すなわち最高の権力と栄光の座に着くことが定められ、主なる神とともに働き支配し、敵を完全に制服することが定められたお方、即ち神と同質のお方だ、神である、とこれもダビデが「御霊によって」示されて言っている真理だとイエスは言われました。

そして改めて「ダビデがキリストを主と呼んでいるのなら、どうしてキリストがダビデの子なのでしょう。」とお尋ねになりました。

さあ、どう答えましょうか。

第一の(直接的な)答えは「ダビデがキリストを主と呼んでいる」のだから「キリストがダビデの子」ではない、ということになります。

それは始めにイエスが「キリストについて…彼はだれの子ですか。」と言われたのに対して「ダビデの子です。」と答えた「パリサイ人たち」の答えー彼らの「キリストについて」の考えーの否定としてそういうことになります。

パリサイ人たちが期待し願望していた、父祖ダビデのような、ダビデと同列の、またダビデより偉大だとしてもどこまでも人間でしかない「ダビデの子・キリスト」をイエスははっきりと否定なさったのです。

その意味で「キリスト」が「ダビデの子」でないとするれば、いったい「彼はだれの子ですか」。

そこにはもう「神の子です」と言うほかの答えはありません。

「キリストについて」、「一番重要」(36)なこと、「重要な第一」(38)のこととしてイエスがパリサイ人たちに教えたかったことは、彼は「神の子です」ということだったのです。

「キリスト」は、彼らが間違っ期待し願望しているような「ダビデの子」(人間でしかない者、人間的な権力・武力でローマ帝国の支配から自分たちを救ってくれるだけの人間)ではなく「神の子」だと(ということは神だということでもあります)イエスは彼らにお教えになったのです。

しかし、「それと同じように重要」(39)なことは、「キリスト」は本当に正しい意味で「ダビデの子(子孫)」として生まれたお方、正真正銘の人間だということでした。

「キリスト」は神のみこころに従って「ダビデの子」として地上に来られた人であり、その点で「キリストがダビデの子」であるとイエスは言われたのです。

キリストは神の子(つまり神)としてダビデの「主」であり、同時にキリストは人としては「ダビデの子」であるお方なのです。

これが「ダビデがキリストを主と呼んでいるのなら、どうしてキリストがダビデの子なのでしょう。」というイエスの問いについてイエスがお示しになった(第二の)答えなのでした。

この第一の答えも第二の答えもパリサイ人たちは答えることができませんでした。

「するとだれ一人、一言もイエスに答えられなかった。」(22:46a)のでした。

なぜでしょうか？

「わかりません」と答えようものなら、それはイエスに負けたことになると思ったので

しょうか。

またもし先ほど考えた答えを言うならばそれは自分たちの「思い違い」を認めることになり、やはりイエスに負けたことになると思ったのでしょうか。

そしてこれまでのイエスの言動からして、またイエスとこれまでのやりとりからして、この「キリスト」というのはイエスが自分のことを言っておられることは明らかですから、ここでもイエスの言うことを認めるわけにはいかなかったのでしょうか。

こうして「その日から、もうだれも、あえてイエスに質問しようとはし」(22:46) ませんでした。

それはイエスの前にへりくだってイエスの教えに耳を傾けようということでは決してありませんでした。

全く反対でした。

ここにパリサイ人たち律法学者たちは、イエスを「神の子・キリスト」とは絶対に認めず、イエスに反対しイエスを拒絶する姿勢を決定的としたのです。

こうしてイエスの十字架の死に向かう姿勢もまた決定的となりました。

しかしそのことによって、後に使徒パウロが言っているようにイエスが「肉によればダビデの子孫から生まれ、聖なる霊によれば、死者の中からの復活により、力ある神の子として公に示された方」(ローマ 1:3-4 より) であることが証されるのです。

このお方にしか私たちの救いはありません。

そして私たちがこの神(の子)であり同時に人であられるお方イエス・キリストを信じ、受け入れ、愛するところからのみ、「神を愛し、隣人を愛する」ことが始まるのです。